

# 東洋學叢

「大乘五方便」の成立と展開

伊吹 敦(1)

今は無佛時代か有佛時代か？

—佛の遺骨と生きている佛—

岩井 昌悟(18)

ダルマースートラにおける贖罪規定の位置づけ

沼田 一郎(128)

『ゴークナート語録』研究

—「パド・ラーグ・ラーマグリー」(11-32)の本文と和訳—

橋本 泰元(154)

『トリスタリーセートウ』における聖地巡礼の規則

宮本 久義(168)

東洋大学文学部紀要第65集

インド哲学科篇

XXXVII

## 研究室報告

① 本年度は、新入生歓迎行事として四月二十四日に「新入生研修旅行・秩父札所巡り」を行った。三十四所から、札所一番（誦経山四萬部寺）、札所二十三番（松風山音楽寺）、札所三十一番（鷲窟山観音院）の三ヶ所を選び、バスで巡った。新入生には大いに好評で、学生相互あるいは教員との交流を深めることができた。関係各位には厚く御礼申し上げます。

② 本年度も五月二十八日に「東洋大学文学部伝統文化講座」の一環として、インド哲学科主催、東洋大学仏教会・仏教青年会ならびに仏教文学会協力にて、仏像ガール・廣瀬郁美氏による「公開講演・感じるからはじめよう！ 仏像の旅」と真言宗豊山派迦陵頻伽聲明研究会ならびに真言宗豊山派仏教青年会の皆様による「聲明公演・祖師への不断の祈り―弘法大師御影供」を開催した。

また十二月三日には第三回東洋大学インド祭を開催した。平成七年度本学科卒業生の森山繁氏（シケジー）をはじめとする、たくさんのお出演者の皆様の好演を賜った。出演者の皆様には厚く御礼申し上げます。

③ 本年度、特別講義を拜聴した外国の先生は左記の通りである。

ウニーター・サッチターナンド先生（インド国立デリー大学東アジア学科准教授）「インドにおける日本語・日本文学の受容について」平成二十三年十一月十一日（金）五時限「ヒンディー文献を読むB」

④ 本年度も大学院の公開研究発表会を春学期（七月二十七日）と秋学期（十一月三十日）に開催した。前期の発表者は、今村英明（M2）、天野まゆこ（M2）、中村玲太（M2）、藤森晶子（D3）、曾清満（D3）、オータム（D3）の六名、後期の発表者は、津田昌良（M3）、島崎慶子（M3）、チャイトンディー・プラチャッポン（D3）、澤田容子（D3）の四名であった。

なお春学期の発表会に際して、宮崎展昌氏（日本学術振興会特別研究員PD）の研究発表を聴講する機会を頂戴した。

⑤ 本年度のティーチングアシスタントは、井原知子、ウリジジリガラ、藤森晶子の各氏が担当した。なお三澤祐嗣氏も四月から九月まで担当した。

⑥ 本年度の卒業論文・制作の提出者は、I部が四八名、II部が三名であり、大学院の修士論文提出者は五名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は左記の通りである。

・校友会奨学金

学部 大川詩織（I部）、林 明音（II部）

大学院 中村玲太

・勸学奨学基金

学 部 堤 博枝 (I部)、櫻井美佳 (II部)

・田村芳朗奨学基金

学 部 藤井 明 (I部)、小林大昂 (I部)

平成二十三年年度業績（平成二十三年一月～十二月）

竹村牧男

〈著書〉

竹村牧男監修『いま、生きる 良寛の言葉』青春出版社、平成二十三年六月十五日、新書版、三〇～二六頁

〈論文〉

The human dimension in sustainability science, Sustainability Science: A Multidisciplinary Approach, ed. by Hiroshi Komiyama et al., United Nations University Press, 2011, pp.336～355.

「空思想から主体性へ——仏教的個としての実存を考える」、実存思想協会編、実存思想論集二六（第二期第一八号）、『思想としての仏教』、理想社、平成二十三年六月二十五日、五～二九頁

「西田の禅思想をめぐって——逆対応から平常底へ」、『西田哲学学会年報』第八号、西田哲学会、平成二十三年七月十日、一～一九頁

〈その他〉

「あとがき」、竹村牧男監修・井上円了『妖怪玄談』大東出版社、平成二十三年一月二十八日、二九六～三〇二頁

「無一物中無尺蔵」、『P H P』平成二十三年三月号、通巻七五四号、平成二十三年二月十日発行、三二～三三三頁

「能と仏教のこころ」、第九回興福寺勸進能パンフレット、平成二十三年七月

〈学会発表等〉

日本印度学仏教学会第六二回学術大会パネルB「仏性思想の東アジア的展開」にて、代表者を務め、司会・進行を担当。平成二十三年九月八日、一三時四〇分～一六時一〇分。京都・龍谷大学東齋二〇一教室

「自然観の役割——人間と自然の共生関係を求め」、TEEPH主催公開シンポジウム「人間と自然の共生と持続可能な関係を求めて——『風土』のしらべから」、平成二十三年一〇月八日、井上円了ホール

「迫られる文明原理の転換と宗教哲学の使命——人間は欲望を制御できるか?」、第二回宗教と環境シンポジウム「新しい文明原理の生活化と宗教」基調講演、宗教・研究者エコ・イニシアティブ（RSE）主催、国際哲学研究センター共催、平成二十三年十一月十二日、一〇二教室（白山キャンパス一号館一階）

「自力と他力のあわい——西田の宗教哲学から」、第一〇七回公共哲学京都フォーラム「自力と他力のあわい」、平成二十三年十二月四日、リーガロイヤルNCB（大阪・中之島）

〈講演〉

“Japanese Spirituality”, at Japan Week in Saarland University, Saarbrücken, 2011, 6.21.

「井上円了の「奮闘哲学」、臨濟寺禪カルチャー、平成二十三年六月二十六日、臨濟寺（静岡市）」

「東洋大学の創立者・井上円了の「奮闘哲学」、浦水会宮城県支部定期総会、平成二十三年七月十七日、K K R 仙台

「井上円了の人と思想」、創立百二十五周年記念東洋大学全国行脚講演会⑤新潟、平成二十三年九月十日、新潟県民会館

「日本の靈性について―日独交流百五十周年にちなんで」、在家仏教協会講演会、平成二十三年九月二十四日、大手町ビル

「井上円了の人と思想」、創立百二十五周年記念東洋大学全国行脚講演会⑥大阪、平成二十三年十月一日、堺市民会館

「人間と自然」、天門美術館秋季特別展講演会、平成二十三年十月九日、天門美術館（大阪府枚方市）

「良寛さまと禪のころ」、第二回東洋大学文化講演会⑤姫路、平成二十三年十月十五日、姫路市市民会館大ホール

「一遍」、NPO法人東京自由大学二〇一一年度人類の知の遺産、平成二十三年十二月三日、NPO法人東京自由大学（東京都千代田区神田）

〈講座〉  
「井上円了の人と思想」、生命科学部特別講義、平成二十三年十一月三十日、板倉キャンパス

〈その他〉

「東洋大学「国際化」の現状と課題」、学長フォーラム第一回「国際化」、平成二十三年七月九日、東洋大学白山校舎六三三〇番

教室（六号館三階）

バイオ・ナノエレクトロニクスセンター主催国際シンポジウム  
「豊かな社会・平和な社会を築く科学・技術・教育」のパネリスト、平成二十三年九月十九日、日経ホール（東京都・大手町）

東洋大学創立百二十五周年学長会議「グローバル化社会における大学の役割―アジア社会との関わりにおいて」にて、座長を務める。平成二十三年十一月十五日、日経ビル・セミナールーム二（東京都・大手町）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職  
日本印度学仏教学会（評議員）／日本宗教学会（理事）／比較思想学会（理事）／仏教思想学会（理事）／東方学会（会員）  
／共生社会システム学会（理事）  
〈研究プロジェクトへの参加〉

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（IIFPH）・自然観探究ユニット代表者  
東洋大学国際哲学研究センター（センター長・村上勝三）「東洋大学」第一ユニット研究員

〈教育活動〉

学内担当科目  
学部・日本仏教のあゆみ A・B  
大学院・日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（前期課程）

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（後期課程）

〈大学・学部管理・運営活動〉

学長 理事／井上 四丁記念学術センター所長／東洋大学東洋学  
研究所研究員／東洋大学国際哲学研究センター研究員

宮本久義

〈論文〉

『マツヤ・プラーナ』第一八五章・和訳と註解―『マツヤ・プ  
ラーナ』所収の「ヴァーラーナスイ・マーハートミヤ」に  
ついて（4）（単著、『東洋学論叢』第三六号〈東洋大学文  
学部紀要〉第六四集〉、平成二十三年三月三十日、一七九―  
一九四頁）

「インドの聖地と環境問題―聖地バナールラスにおける生活と信  
仰をめぐる」（単著、『南アジアの文化と社会を読み解く』  
慶應大学東アジア研究所、平成二十三年十一月三十日、六九  
―八四頁）

〈翻訳〉

「ジャヤンドラ・ソーニー『インド哲学史における異文化間の  
関わり―討論と対話による共生の一例―』(Inter-cultural  
Relevance of Some Moments in the History of Indian Philosophy: A  
Case of Co-existence Through Debate and Dialogue の和訳)」(単  
著、『共生思想研究年報二〇一〇』東洋大学共生思想研究セン  
ター、平成二十三年三月三十一日、一五一―一五五頁)

「ジャヤンドラ・ソーニー『聖典シヴァ派における人間観』(The  
Concept of Man in Śaiva Sādhāna の和訳)」(単著、『共生思想  
研究年報二〇一〇』東洋大学共生思想研究センター、平成  
二十三年三月三十一日、一六一―一六四頁)

「ジャヤンドラ・ソーニー『ジャイナ教における人間観』(The  
Concept of Man in Jainism の和訳)」(単著、『共生思想研究年  
報二〇一〇』東洋大学共生思想研究センター、平成二十三年  
三月三十一日、一六九―一七五頁)

〈その他〉

「『閉鎖系の共生』から『開放系の共生』へ―インドにおける  
共生の問題」(単著、『共生思想研究年報二〇一〇』東洋大学  
共生思想研究センター、平成二十三年三月三十一日、十二―  
十五頁)

「『三界を流れる川ガンジス』(単著、『紫明』第二十九号、紫明  
の会、平成二十三年十月一日、十一―十四頁)

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本南アジア学会(常務理事、事務局長)／日本印度学仏教  
学会(評議員)／日本宗教学会(会員)／日本佛教学会(会  
員)／建築史学会(会員)／早稲田大学東洋哲学会(理事)  
日本南アジア学会事務局長として、学会運営に携わる

〈調査活動〉

「ヒンドゥー聖地カーマキヤの実態調査」、平成二十三年三

月十三日～二十一日、インド・アッサム州カーマキヤー寺院、  
コルカタ、バナールス、デリーにて調査)

〈研究プロジェクトへの参加〉

東洋大学国際哲学研究センター(センター長・村上勝三「東洋  
大学」第三ユニット研究員

「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述  
(科学研究費・基盤A)」(連携研究者、代表・水野善文「東京  
外国語大学」) 古典文学研究班に所属しサンスクリット文学の  
研究を行う

〈教育活動〉

学内担当科目

学部・インド古典哲学A・B (I部)

インド現代思想 (II部)

現代のインド (II部)

ヨーガとアーユルヴェーダ (I部)

インド学仏教学演習② (I部)

インド学仏教学への誘い (I部)

インド学仏教学への誘い (II部)

全学総合IA「エコ・フィロソフィ入門」(I・II

部乗り入れ) 一回担当

「ガンジス川をめぐるインドの環境問題」(平成

二十三年四月二十八日)

全学総合IA②「哲学への誘い」(I・II部乗り入れ)

一回担当

「ヨーガにおける心と身体」(平成二十三年六月  
二十日)

全学総合IIA「妖怪学」リニューアル」(I・II  
部乗り入れ) 一回担当

「インドにも百鬼夜行」アジアの妖怪(一)」(平  
成二十三年六月七日)

共通総合Ⅳ「校友会寄附講座」(I・II部乗り入れ)  
一回担当

「大学の歴史②(アジア編)ーアジアにおける近  
代化と大学の成立」(平成二十三年五月二十八日)

宗教をめぐる諸問題B (I・II部乗り入れ) 二回担  
当

「ヒンドゥー教とは何か」(平成二十三年十月  
二十二日)

「ヒンドゥー教における聖者③(現代)」(平成  
二十三年十一月二十六日)

大学院・サンスクリット文献研究I・インド哲学研究指導I  
(前期課程)

インド哲学特殊研究I・インド哲学研究指導I(後  
期課程)

学外担当科目

総合講座「東洋医学の人間科学」中、「ヨーガとアーユルヴ

エーダ」を担当（早稲田大学人間科学部、平成二十三年十月二十一日・十月二十八日）

〈社会的活動〉

講座「古代インドの輪廻思想―人は死んだらどこへ行くのか」、東洋大学生涯学習センター・エクステンション学習講座B「東洋思想への誘い」、平成二十三年五月二十一日、東洋大白山キャンパス

講演「ヒンドゥー教のコスモロジー―世界の構造と死後の世界」ユーラシアにおける汎文化圏的な世界認知研究会、立教大学池袋キャンパス（平成二十三年九月二十五日）

講演「インドの先祖供養」成田山仏教文化講座、平成二十三年十一月十二日、成田山新勝寺大本堂地階第一講堂

講演「インドの聖地信仰―神話の世界を読み解く」日本仏教興隆協会文化講座、平成二十三年十一月十八日、梅窓院・祖師堂（東京・南青山）

公開シンポジウム「人間と自然の共生と持続可能な関係を求めて―「風土」のしらべから」東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPB）主催におけるコメントータ  
1、東洋大学白山キャンパス・井上円了ホール（平成二十三年十月八日）

（財）東京大学仏教青年会評議員

〈大学・学部管理・運営活動〉

大学院文学研究科インド哲学仏教専攻主任／大学院奨学生選

考委員／東洋大学東洋学研究所研究員／東洋大学国際哲学研究センター研究員・副センター長／井上円了の志したものは選考委員

橋本泰元

〈論文〉

『ゴラクナート語録』研究―「パド・ラーク・ラーマグリー」(一〇一〇)の本文と和訳(単著、『東洋学論叢』三六号(東洋大学文学部紀要第六十三集)平成二十三年三月三十日、一六五―一七八頁)

“A Study of an Aspect of Kabir’s Bhakti with the Text and Translation of the Gyāna Caṁṁitṣā in the Bijāk,” Shima, Iwao (et al eds.), *The Historical Development of the Bhakti Movement in India*, New Delhi: Mahohar, 2011, pp. 213-222.

“Shikoku Pilgrimage ‘henrō’, Japan: A search in Harmonious co-existence between Nature and Man” (ラーナー P. B. シンフ博士と共著、『南アジア・アフエアーズ』第七号、平成二十三年三月、二七―六七頁)

〈翻訳〉

「ラーナー・P. B. シンフ『カーシー・カビール・共生―バナラス市におけるヒンドゥー教徒とムスリムの共生の風景』(Kāṣī, Kabīr, Kyōsei の和訳)」(単著、『共生思想研究年報』二〇一〇)東洋大学共生思想研究センター、平成二十三年三



月三十一日、一四一～一四五頁)

〈監訳〉

「ラーナー・P.B. スインフ『ガンディーの〈持続可能な発展〉思想——共生の道 (Mahatma Gandhi's Vision of Sustainable Developmentの和訳)』(R.A.三澤祐嗣と共訳、『共生思想研究年報二〇一〇』東洋大学共生思想研究センター、平成二十三年三月三十一日、一三五～一三九頁)

「ラーナー・P.B. スインフ『エコ・スピリチュアリティと共生——有機的視野とグローバル・メッセージ』(Ecospirituality & Knowaの和訳)』(R.A.林香奈と共訳、『共生思想研究年報二〇一〇』東洋大学共生思想研究センター、平成二十三年三月三十一日、一四七～一五〇頁)

〈その他〉

「ヒンドゥー教とイスラームの『共生』——その〈境界性〉において」(単著、『共生思想研究年報二〇一〇』東洋大学共生思想研究センター、平成二十三年三月三十一日、七～一頁)

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学佛教学会 (理事) / 日本宗教学会 (会員) / 日本南アジア学会 (会員) / 日本佛教学会 (会員)

〈研究・調査活動〉

「ヒンドゥー教女神信仰聖地カーマキヤの実地調査」、平成二十三年三月十三日～二十一日、インド・アッサム州カーマ

キヤール寺院、コルカタ、バナールナス、デリーにて調査。

「スイク教における共生思想の研究」(共同研究者・R.A.三澤祐嗣) 東洋大学国際哲学研究センター(第三ユニット) 予算にて平成二十三年九月十六日～二十六日、インド・パンジャール州アムリットサル市を中心にした開祖ナーナクおよび以降の教祖たちゆかりのスイク教寺院グルドワラーにおける宗教儀礼の調査および文献収集。

〈研究プロジェクトへの参加〉

「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述」(平成二十三年度科学研究費補助金「基盤研究(A)」研究代表者・水野善文「東京外国語大学」連携研究者)

「ヒンディー・ウルドゥー韻律のリズム構造の解明——ペルシア起源説の検証をとおして」(平成二十三年度科学研究費補助金「基盤研究(B)」研究代表者・長崎広子「大阪大学」研究分担者)

東洋大学国際哲学研究センター(センター長・村上勝三「東洋大学」第三ユニット研究員)

〈教育活動〉

学内担当科目

学部・インドの宗教A・B (I・II部)

ヒンディー文献を読むA・B (I部)

ヒンドゥー教とは何か(秋学期) (I部)

インド学仏教学演習③ (I部)

仏教の芸能（秋学期、コーディネーター）（Ⅱ部）

宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）二回担当

「ヒンドゥー教における聖者②（中世）」（十一月十二日、六時限）

「スイク教と聖者」（十一月十九日、六時限）

文学部伝統文化講座「聲明講演」（五月二十八日主催）

校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当

「哲学館初期のカリキュラムの特色——哲学を如何に教育するのか」（七月二日、五時限）

大学院：インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（前期課程）

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（後期課程）

学外担当科目

大正大学学部：ヒンディー語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

〈大学・学部管理・運営活動〉

文学部自己点検・評価委員会委員／東洋大学東洋学研究所研究員／東洋大学国際哲学研究センター研究員

〈社会的活動〉

団体役員等

大法輪石原育英会評議員

渡辺章悟

〈著書〉

『ブッダを知る事典』佼成出版社、(菅沼晃との共編・監修)・執筆(単著)、平成二十三年九月、全三四九頁

〈論文〉

「大乘仏典における法滅と授記の役割——般若経を中心として」単著、『大乘仏教の誕生』第三章(シリーズ大乘仏教・第二巻)春秋社、平成二十三年十二月七十三〜一〇八頁

〈その他の業績〉

「大般若会」『比叡山時報』第六七一号、平成二十三年一月八日(土曜日) 九頁

「涅槃会」『比叡山時報』第六七二号、平成二十三年二月八日(火曜日) 三頁

「無尽燈」『比叡山時報』第六七三号、平成二十三年三月八日(火曜日)、三頁

「大乘仏教論——空観と慈悲」『佛教文化』百五十二号、東京国際仏教塾、平成二十三年八月、一四〜二一頁

「慈悲は共生社会の原理となりうるか」『浅草寺 仏教文化講座』第五五集(平成二十三年八月)浅草寺発行、一五二〜一六八頁

「慈悲は共生社会の原理となりうるか」①『浅草寺』十一月号(通巻五九五号)、平成二十三年十一月一日、浅草寺教化部四七〜五四頁

「慈悲は共生社会の原理となりうるか」②『浅草寺』十二月号(通巻五九六号)、平成二十三年十二月一日、浅草寺教化部、三三〇頁

四〇頁  
「誰でも読める般若心経」『在家仏教』平成二十三年一月号、社団法人在家仏教協会、四四〇～四七頁

〈学会発表〉

日本仏教学会第八一回学術大会・統一テーマ「経典とは何か」  
「経典の成立と展開受容」にて研究発表「般若経の成立過程」、平成二十三年八月三〇日、札幌・北海道大学

日本印度学仏教学会第六二回学術大会パネルA「般若心経研究の現在」にて、代表者を務め、司会・進行を担当。平成二十三年九月八日、京都・龍谷大学(大宮学舎)東齋二〇一教室

〈講演・講座〉

「日本文化における『般若心経』」黄檗研究会、平成二十三年四月十三日、港区北青山・黄檗宗海蔵寺

「大乘仏教の思想——空観を中心に」NPO 法人かわさき市民アカデミー、平成二十三年五月二十五日、川崎市麻布区万福寺・新百合21ビル

「大乘仏教概論——空観と慈悲」東京国際仏教塾特別講義、平成二十三年六月四日、文京区本郷・東京大学仏教青年会会館  
「絵文字般若心経」真言宗智山派・慈雲山観蔵院施餓鬼講話、平成二十三年七月二十四日、練馬区南田中

「絵で読む般若心経」館林市民の会、平成二十三年八月二十四日、群馬県館林市民会館

「The Cornerstone of Early Mahayana Buddhism: The Role of "Destruction of the Dharma" and "Predictions"」金剛大学校招請講演、平成二十三年十一月四日、韓国・金剛大学校

「般若経における智慧の展開」金剛大学校仏教文化研究所、平成二十三年十一月四日、韓国・金剛大学校

「般若経研究点描」大谷大学仏教学会講演会、平成二十三年十二月五日、京都・大谷大学尋源講堂

「明治の仏教と仏教青年会運動」智山伝法院・近代と仏教研究会、十二月十九日、真言宗智山派別院真福寺、港区愛宕東洋ビル  
〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会(理事・常務委員・評議員・企画編集委員)／日本西蔵学会(委員)／日本宗教学会(評議員・プログラム委員)／日本佛教学会(会員)／仏教思想学会(会員)／東アジア仏教学会(会員)／国際仏教学会 IABS(会員)／国際真宗学会(会員)

〈学会・調査〉

日本仏教学会第八一回学術大会に参加、平成二十三年八月三十日、於北海道大学  
日本印度学仏教学会第六二回学術大会(理事会及び研究発表)に参加、龍谷大学、平成二十三年九月七日～八日

〈研究プロジェクトへの参加〉

東洋大学東洋学研究所プロジェクト・東アジアにおける仏教の  
受容と変容」の研究代表者

東洋大学国際哲学研究センター（センター長・村上勝三）「東洋  
大学」第三ユニット研究員

「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」（文  
科省科学研究費「基盤研究（A）」、研究代表者・斎藤明「東  
京大学」、研究分担者）

〈教育活動〉

学内担当科目

学部：ブツダの思想とその展開 A・B（Ⅰ・Ⅱ部）

大乘仏教の思想Ⅰ（Ⅱ部）

インド学仏教学演習④（Ⅰ部）

インド学仏教学演習（Ⅱ部）

文学部総合科目Ⅰ（Ⅰ・Ⅱ部共通）

宗教をめぐる諸問題 A・B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）五

回担当および講座責任者

「開講にあたって」（四月九日、六時限）

「大乘仏教とは何か」（四月二十三日、六時限）

「大乘仏教における聖者」（五月七日、六時限）

「講座のまとめ・平常試験」（七月十六日、六時  
限）

「講座のまとめ・平常試験」（一月十四日、六時

限）

校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）三回担当なら  
びに全体責任者

「井上円了は何を指し、何を実現しようとした  
か―その生涯と実践」（四月九日、五時限）

「井上円了が受けたカルチャーショック―円了  
は海外で何を見、何を考えたのか」（六月二十五  
日）五時限

「春学期講義のまとめ・通常試験」（七月十六日、  
五時限）

「哲学館から東洋大学へ」（九月二十四日、五時限）  
「井上円了の生涯をかけた熱き戦い―最後の著  
作『奮闘哲学』による」（一月七日、五時限）

「講座のまとめ・平常試験」（二月十四日、六時限）

大学院・大乘仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（前  
期課程）

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（後期課程）

学内担当科目

〈大学・学部管理・運営活動〉

教職課程運営委員／東洋大学東洋学研究所（運営委員・研究所  
員・『東洋学』編集委員）／東洋大学国際哲学研究センター研  
究員

〈社会的活動〉

〔財〕 仏教伝道協会・英訳大藏経編集委員会（委員）・仏教聖典編集委員会（委員）／（財） 全日本仏教会国際交流審議会（委員）／（財） 東方研究会（研究員）／（財） 大法輪渡奨学生選考委員会（委員）・（財） 仏教学術振興会（役員）

〈社会活動・公開講座〉

講義「仏典の世界―開かれたコミュニケーション」（東洋大学〈学びライブ〉での講義）、平成二十三年六月十九日（日）  
東洋大学

伊吹 敦

〈論文〉

「東山法門」の人々の傳記について（下）〔単著、『東洋學論叢』第三六号（『東洋大学文学部紀要』第六四集）、平成二十三年三月三十日、二五～一〇七頁〕

「神秀の受戒をめぐる」〔単著、『禪文化研究所紀要』三一、平成二十三年三月三十一日、五一～七三頁〕

「東山法門和儒教國家権力」〔単著、『禪文化』第一輯、中州古籍出版社（中国、鄭州）、平成二十三年四月、四一九～四四五頁〕

〈その他〉

「宋の南遷と禪（下之下） 要説・中国禅思想史 二八」（『禪文化』二一九、平成二十三年一月二十五日、三〇～三八頁）

「南宋・金の滅亡と禪（上） 要説・中国禅思想史 二九」（『禪文化』二二〇、平成二十三年四月二十五日、一三二～一三八頁）  
「南宋・金の衰亡と禪（中） 要説・中国禅思想史 三〇」（『禪文化』二二一、平成二十三年七月二十五日、五四～六一頁）  
「南宋・金の衰亡と禪（下之下） 要説・中国禅思想史 三一」（『禪文化』二二二、平成二十三年十月二十五日、一三五～一四二頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

東アジア仏教研究会（役員）／日本佛教学会（会員）／日本印度学仏教学会（会員）／早稲田大学東洋哲学会（会員）／財団法人東方学会（会員）

学会発表等

「道臻は本当に華嚴の祖師だったか？」（日本印度学仏教学会第六十二回学術大会、第八部会、平成二十三年九月七日、龍谷大学）

「禪宗の成立と仏性観の変容」（日本印度学仏教学会第六十二回学術大会、パネルB、平成二十三年九月八日、龍谷大学）  
日本佛教学会平成二十三年度学術大会にて水野莊平（愛知学院大学）、松田陽志（駒澤大学）両氏の発表のコメンテーターを担当（平成二十三年八月三十一日、北海道大学）

講演

「社会学視野下の初期禅宗史―兼評柳田聖山の禅宗研究」（中国人民大学佛教与宗教学理论研究所主催学術講演会、平

成二十三年三月十六日、人文楼六階会議室)

〈研究プロジェクトへの参加〉

東洋大学国際哲学研究センター(センター長・村上勝三「東洋

大学」第一ユニット研究員

〈教育活動〉

学内担当科目

学部・インド学仏教学演習⑦(Ⅰ部)

インド学仏教学演習⑩⑫(Ⅱ部)

中国仏教のあゆみA・B(Ⅰ・Ⅱ部)

禅の思想(春学期)(Ⅱ部)

宗教をめぐる諸問題A・B(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)二

回担当

「中国仏教とは何か」(五月十四日、六時限)

「中国仏教における聖者」(五月二十一日、六時限)

校友会寄附講座(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)一回担当

「哲学館の後継者たちの活躍―境野黄洋、高嶋米

峰など」(十月二十二日、五時限)

大学院・中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ(前期課程)

仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅳ(後期課程)

〈大学・学部管理・運営活動〉

インド哲学科Ⅱ部主任、文学部内資格審査委員会委員、文学部

内図書館図書選書担当者、東洋大学東洋学研究所研究所員／

東洋大学国際哲学研究センター研究員

山口しのぶ

〈論文〉

「光り輝くシヴァ神の聖地―リンガ寺院の神話と象徴―」『聖

地と聖人の東西 起源はいかに語られるか』(藤巻和宏編)、

勉誠出版、平成二十三年八月三十一日、四五二―四七二頁

〈その他〉

「マチェンドラ・ナート寺の百八観自在」(立川武蔵氏、ガウタ

ム・R・パジュラーチャールヤ氏との共著)『曼陀羅のほとけ

たち』(立川武蔵編、千里文化財団、平成二十三年七月三十日、

六六―九九頁

書評「森雅秀著『インド密教の儀礼世界』、『宗教研究』第八五

巻第三輯、平成二十三年十二月、一四八―一五三頁

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会(会員)／日本宗教学会(会員)／南ア

ジア学会(会員)／日本佛教学会(理事)／日本西蔵学会(会

員)／密教図像学会(会員)／東海印度学仏教学会(会員)

／パリー学仏教文化学会(会員)

〈調査活動〉

インド、プネー市およびネパール、カトマンドウ盆地での儀礼

調査(平成二十三年八月一日―八月十八日、平成二十三年度

科学研究費による調査)

中国、北京におけるチベット仏教の儀礼調査(平成二十三年九

月二十五日～二十九日、東洋学研究所共同研究プロジェクト  
「東アジアにおける仏教の受容と変容―智の解釈をめぐって―」(研究代表者:渡辺章悟氏)の一環)

〈研究助成〉

「マハーラーシュトラ州におけるヒンドゥー教巡礼地の研究」  
(平成二十三年度科学研究費〔基盤研究(C)〕研究代表者)

〈講演〉

「仏さまに祈る―仏像と儀礼のかかわりを探る」(第三回愛宕  
薬師フォーラム、平成二十三年二月一日、別院真福寺地下講堂)  
「河口慧海の真実」(東洋大学全国行脚講演会 in 大阪、平成  
二十三年十月一日、堺市民会館)

〈研究プロジェクトへの参加〉

東洋大学国際哲学研究センター(センター長・村上勝三〔東洋  
大学〕第三ユニット研究員)

〈教育活動〉

学内担当科目

学部・インド学仏教学演習⑧(Ⅰ部)

チベット文献を読むA・B(Ⅰ部)

宗教学ⅡA・B(Ⅱ部)

インド学仏教学への誘いA(Ⅱ部)

チベット仏教のあゆみ(Ⅱ部)

インド美術を見る(Ⅱ部)

宗教をめぐる諸問題A・B(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)

「チベット仏教とは何か」(七月二日)  
「チベット仏教における聖者」(七月九日)

大学院・大乘仏教研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ(前期課程)

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ(後期課程)

〈大学・学部管理・運営活動〉

インド哲学科第一部主任／東洋大学東洋学研究所研究員／東洋  
大学国際哲学研究センター研究員

沼田一郎

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本南アジア学会(会員・英文叢書委員会委員・幹事)／日

本印度学仏教学会(会員)／日本佛教学会(会員)／

研究発表・シンポジウム・講演・特別講義

東洋大学国際哲学研究センター第二ユニット第二回研究会

「インド古代法研究における方法論的試論」(平成二十三年十

月二十四日 東洋大学白山キャンパス)

〈研究プロジェクトへの参加〉

東洋大学国際哲学研究センター(センター長・村上勝三〔東洋

大学〕第二ユニット研究員)

〈教育活動〉

学内担当科目

学部・サンスクリット文献を読むA・B(Ⅰ部)

古代インドの社会（Ⅰ部）

インド学仏教学演習①（Ⅰ部）

インド学仏教学演習（Ⅱ部）

インド古典哲学（Ⅱ部）

宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）二回担当  
「ヒンドゥー教における聖者①（古代）」（十月二十九日）

「ゾロアスター教における聖者」（十二月三日）

全学総合IA一回担当「古代インドにおける実践倫理」（七月十一日）

〈大学・学部管理・運営活動〉

東洋大学東洋学研究所研究員・運営委員／東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』編集委員／国際哲学研究センター運営委員・研究員／文学部予算委員会委員／文学部カリキュラム委員会委員

〈社会的活動〉

講演「インドの哲学・文化とインド人の哲学・社会文化の様相」

（日本生産性本部第八期グローバルトップセミナー）インド・中国・アジア新興国の理解と競争；ビジネスモデルを探る）平成二十三年一月二八日、セミナーハウス フォーブリッジ。

模擬授業「誰が聴き誰が見るのか」「わたし」の本質」（平成

二十三年一月二六日 小野学園女子高等学校）

公開講座「古典インドにおける人の一生―誕生から死後の相続の問題まで―」（東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座B〈東洋思想への誘い〉）平成二十三年六月十一日、東洋大学白山キャンパス。

岩井昌悟

〈論文〉

「一世界一佛と多世界多佛」（単著、『東洋学論叢』第三十六号）（東洋大学文学部紀要」第六四集）、平成二十三年三月三十日、一三八～一六四頁）

〈その他〉

「『ブツタをめぐる人々』敵対した者たち」・「ゆかりの地名」（単著、『大法輪』第六号〈特集―これでわかるブツタ〉、平成二十三年六月一日、八〇～九〇頁）

「この世のありよう」（単著、『大法輪』第二一号〈特集―仏教から何が学べるか〉、平成二十三年十一月一日、五九～六三頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職  
日本印度学仏教学会（会員）／日本宗教学会（会員）／日本佛教学会（会員）／仏教思想学会（会員）／パリー学仏教文化学会（普通会员）、日本チベット学会（会員）



研究発表

「今は無仏時代か有仏時代か？」（東洋大学東洋学研究所研究発表例会、平成二十三年十二月十四日）

〈研究プロジェクトへの参加〉

「東洋大学東洋学研究所プロジェクト・東アジアにおける仏教の受容と変容」の研究分担者

東洋大学国際哲学研究センター（センター長・村上勝三「東洋大学」第一ユニット研究員

〈教育活動〉

学内担当科目

学部・インド学仏教学演習⑤（Ⅰ部）

インド仏教のあゆみA・B（Ⅰ・Ⅱ部）

パリー文献を読むA・B（Ⅱ部）

初期仏教の思想（Ⅱ部）

インド学仏教学への誘いA（Ⅰ部）

仏教を歩く（Ⅱ部）

宗教をめぐる諸問題A・B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）

「初期仏教とは何か」（四月九日、六時限）

「初期仏教における聖者」（四月十六日、六時限）

校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当

「日本をどう考えるのか——井上円了の忠と孝」

（六月十一日、五時限）

〈大学・学部管理・運営活動〉

入試委員会委員／情報機器運営委員会委員／リーフレット委員会委員／東洋大学東洋学研究所研究員・運営委員／東洋大学国際哲学研究センター研究員

〈社会的活動〉

講座「初期仏教の死生観」（東洋大学生涯学習センター公開講座・

エクステンション学習講座B〈東洋思想への誘い——インド

哲学・仏教のエッセンスを探る〉、平成二十三年十月八日、

東洋大学白山キャンパス）

哲学堂祭記念講演「釈迦——他の銀河にブッダは存在し得るか」

平成二十三年十一月五日、哲学堂公園宇宙館

## 平成二十三年度演習ゼミ活動報告

沼田一郎

### インド学仏教学演習①

①テーマ「インド古代史の基礎知識」

②メンバー 幹事・荻島充彦（三年生）、（幹事を除く）四年生

一・二名、三年生八名、二年生一六名

### ③活動報告

今年度は R. S. Sharma: *India's Ancient Past*, OUP, 2006 を講読した。古代インド社会、文化を概説したものであり、かつ英語の講読と行うことでこれを選んだのである。途中からは担当者を決めずに、訳させることにした。このほかには研究発表と卒論指導がゼミ活動の柱である。前者については、三年生の段階から卒論を視野に入れた内容を要求するべきであると感じた次第である。後者の卒業論文については、「卒論指導」として別扱とし、ゼミへの出席を義務づけなかった。できるだけ早い時期にテーマを発見すること、そしてそれについて教員との討論を通して深く掘り下げることを要求した。卒業論文は早くから取り組んだ者とそうでない者との差が出たことはいくつでもない。

「インド地誌」も昨年度に続いて実施した。これはメンバーが任意に選んだ州、都市等についての情報を最大限収集して報

告するといふものである。充実した発表が多かったが、ウェブ情報の扱いや発表態度については、よりきめ細かい指導が必要である。

また、後期からはテーマを自由に設定してのディスカッションを取り入れた。ゼミ活動への活発な参加を期待してのことであつたが、運営を学生に任せるなどの工夫が必要であらう。

宮本久義

### インド学仏教学演習②

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー（春学期）幹事・幹事・大川詩織、副幹事・松井走馬（幹事を除く）四年生一三名、三年生七名、二年生九名、（秋学期）幹事・松井走馬、副幹事・目黒見（幹事を除く）四年生一四名、三年生六名、二年生九名

### ③活動報告

本年度も昨年と同じく四つの班が年間を通して研究するテーマを決め、それに関連するサンスクリット原典あるいは外国語文献の一部を読解することを課題とした。哲学班は春学期にはヴェーダーンタ哲学に取り組み、特にシャンカラの思想的意義について考察した。秋学期はトリヴァルガのうちカーマの解明に取り組んだ。文学班はインドの説話文学研究をテーマとし、「鸚鵡七十話」を中心に浮気女の知恵をめぐって男女の関係を深く考察した。神話班はインド神話における半神・精霊研究を

テーマとし、特にアナンタ、タクシヤカ、カーリヤ、マナサーなどの蛇の性質を追究した。さらに、土着信仰に見られるナーガ崇拜や、ベルシア神話との比較も行った。文化班は映画をテーマとし、インド映画に見られる服飾などの文化、神話との関係、オプー三部作に描かれる死と家族関係など興味ある発表がなされた。本ゼミでは四年生の卒業論文中間発表とともに、三年生、二年生にも卒業論文(制作)に向けての中間構想を発表してもらうことになっていたので、皆早くから研究課題を見つけようとする努力が見られた。

夏期の研修合宿は九月九日から十一日まで、富士見高原セミナーハウスで行った。各自の個人発表では十分に時間をかけて準備された発表が相次ぎ、またゼミ生間の親睦を深めることができた。

## 橋本泰元

### インド学仏教学演習③

#### ① テーマ「ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー ゼミ長…小川亜夕美(三年生)、副ゼミ長…土方健矢(三年生)、他四年生八名、三年生(正副ゼミ長を除く)九名、二年生六名、

#### ③ 活動報告

昨年度に引き続き、初めの数回で本ゼミの授業の主旨、資料概説、卒業論文を視野に入れた論文執筆方法などを講義した。

今年度は、昨年度と違い、個人研究発表が中心となった。内容はヒンドゥー教の神話と神観念、儀礼、中世バクティ思想等が中心であったが、一昨年に続いて、近代における「カースト」論再考など意欲にとんだ発表もあった。さらに古代・中世ヨーロッパ人の「インド観」という新機軸の発表もあった。アーユルヴェエダに関する網羅的な研究も熱心であった。

個人発表における発表とレジュメの作成などの提示方法も徐々によくなってきたと思う。しかし、毎年度の反省点と同じであるが、参考資料のほとんどが邦文文献であり、ヒンドゥー教に関わる原典を読み英文研究資料を批判的に読むという訓練に取り組みを試みを行ったが継続しなかった。

この自主的研究発表と平行して、四年生の卒業論文の中間発表も授業中に行い、さらに夏期研修合宿にでも行った。三年時からの個人ないしグループ発表を継続したことに起因すると思われるが、今年度の卒論発表は、まとまりがよく、結果として概して質の良い論文が多かったと思える。今年度の夏期研修合宿は、鴨川セミナーハウスにて九月十一日～十三日の二泊三日で行った。しかし、初日に予定が重複して、担当は第二日目の四年生の卒論中間発表から参加できた。充実した、また楽しく夏期研修を行えたと思う。

## 渡辺章悟

### インド学仏教学演習④

#### ① テーマ「大乘仏教の研究」

② メンバー 幹事：高橋宏規（四年生）、齋藤大樹（四年生）、（幹事を除く）四年生三名、三年生七名、二年生七名

#### ③ 活動報告

本ゼミは大乘仏教の研究をテーマとするが、その分野はインド・中国・日本と広く捉え、分野を限定せずに多様な視点から仏教研究を行うことを目指している。ゼミの進め方は、毎回特定のテーマを決めて各自が研究発表を行う方法をとっている。これは学生の意欲的な研究活動を促進するためであり、調査し、纏め、発表するという訓練を兼ねている。

本年も最初に担当者が運営方針と大乘仏教の概要を説明し、その後にはすでに経験のある四年生から実際に個人研究を中心とした研究発表を行った。今年のゼミは構成人数からいって四年生が少なめであるため、経験のある三年生と一緒にゼミを盛り上げた。

発表内容はばらつきがあり、梵文の大乘經典に挑んでその説明を行うような文献学的な内容から日本の現代仏教における問題までバラエティーに富んでいた。それぞれの良さはあるものの、やはり二年生は初めての研究発表ということもあり、十分なままに発表するものも見られた。これは発表者の意欲に任せるという当ゼミの方針によるものではあるが、中には驚くほ

ど良質の発表があり、ゼミの参加者も大いに刺激されていた。来年度に向けてさらに期待したい。

夏休みには、九月十二日より二泊三日で研修旅行に出かけた。宿泊した場所は栃木県那須の休暇村で打ち解けながら集中して議論ができる雰囲気での研究発表は、大いに効果があったように思う。また、那須御用邸が解放された林野でのトレッキング、那須岳登山に温泉と、皆大いに合宿を満喫した。来年は山登りに挑戦したい。

## 岩井昌悟

### インド学仏教学演習⑤

#### ① テーマ「初期仏教の研究」

② メンバー（春学期）幹事：小林大昂（四年生）、（幹事を除く）四年生四名、三年生七名、二年生九名、（秋学期）幹事：八島彩香（三年生）、（幹事を除く）四年生五名、三年生六名、二年生九名

#### ③ 活動報告

本年度も昨年度を踏襲し、最初に指導教員が原始仏教聖典について概説し、その後は、卒業論文・卒業制作を視野に入れた「個人研究」と、ゼミ生全員による「共同研究」の二本立てとし、個人研究の報告が一巡したら、共同研究の発表に移り、それが終わるとまた個人研究に戻るという形で、両研究を交互に進めた。なお「共同研究」とはいつでも各人が主体的に同一テーマ

にとりくむ形であり、グループ別の研究ではない。

本年度に設けた共同研究テーマは「初期仏教における男女観」というものであった。この問題を明らかにすべく、各ゼミ生が分担（南伝大藏経で一人三〜四冊）してパトリ聖典を翻訳によって読み進め、毎回読んだ箇所から共同研究テーマに関連するなんらかの発表を行った。翻訳を通してでも、とにかく聖典に直接触れてもらいたいという意図が指導教員側にあり、その点は達成できたであろう。

課外活動は四月二十八日に新ゼミ生歓迎コンパを行ったほか、九月二十三日〜二十五日の日程で河口湖セミナーハウスにて夏期合宿を行った。四年生の卒論中間報告が中心であるが、三、二年生にも個人研究の発表をしてもらった。

四年生二人が卒業論文を提出した。小林大昂君の「初期仏教における餓鬼の研究——天宮餓鬼から捉える五道輪廻と六道輪廻の差異」が田村芳朗賞（田村芳朗奨学金授与）を受賞した。

#### インド学仏教学演習⑥ 本年度休講

#### 伊吹 敦

#### インド哲学仏教学演習⑦

#### ①テーマ

②メンバー 幹事：板敷真純（四年生）、（幹事を除く）四年生五名、三年生七名、二年生五名

#### ③活動報告

本年度は、前期は凝然の『八宗綱要』、後期は『雪竇頌古』をそれぞれ輪読した。いずれも、テキストを適当に区切り、担当者を決めて、各自作成したレジュメに基づいて発表をしてもらった。

日本と中国の仏教を対象とするゼミということで、漢文の訓読の練習は不可欠と考え、前期は『八宗綱要』を読み進めた。当初は凝然の『三國仏法伝通縁起』を読む予定であったが、解説書がないことから、受講生には難しすぎると考え、同じ著者の『八宗綱要』に変更した。やや不本意ではあったが、それでも昔の人の仏教史に対する考え方が現代人と大いに違っていることが理解できて、文献読解という点で、得るものは大きかったと思う。

後期は学生の要望にこたえて『雪竇頌古』を読み始めたが、担当者が無断で休むなどしたため、軌道に乗らない間に授業が終ってしまった。非常に遺憾である。

卒論指導は、授業中の内容発表と研究室での個別指導を随時行ったが、学生によって熱意に大きな違いがあり、できあがった卒論の程度も様々であったが、いずれもそれなりに努力の跡は認められ、一定の水準には達していると判断している。

課外活動としては、コンパを何度か行った外、学生の希望に沿って、夏季休暇中に富士見高原セミナーハウスで合宿を行った。期間短かったが、ほとんど勉強づけの時間を過ごし、卒論

へのモチベーションを高めることができたと思う。

## 山口しのぶ

### インド学仏教学演習⑧

①テーマ「密教研究およびインド・仏教美術の研究」

②メンバー 幹事・河本拓也（三年生）、（幹事を除く）四年生

一・二名、三年生六名、二年生六名

### ③活動報告

本年度春学期は一コマ九〇分を四五分ずつに分けサンスクリットおよび英語の文献講読を行い、秋学期は個人発表を中心にゼミを進めた。サンスクリット文献講読に関しては、昨年度に引き続き、『ラーマヤナ』を簡単にリライトしたテキストを使用し、順番を決めて講読した。昨年度と同様二年生はデーヴァナーガリー文字に慣れていないため別途文字に関するレクチャーを簡単に行った後、分担してテキストのローマナイズ、和訳を行った。このテキストを始めて二年目になり、三、四年生はやり方に慣れてきた。二年生も先輩に聞くなどして自分なりにローマナイズや和訳などを行っていた。充分とは言えないが、ある程度のサンスクリットの訓練にはなったと思われる。また英語の文献講読においては、昨年度同様ジュセッペ・トゥッチの *The Religion of Tibet* をテキストに、学生が和訳を順番に行った。二年生ははじめて同テキストに目を通すこととなったので、前年度の要約を用意して解説を行ってから和訳作業にとりかか

った。英文講読は内容解説が必要だったので、分量がどうしても少なくなってしまうくらいがあり、次年度は多少読みやすく、またゼミの研究テーマと関連するテキストを講読する予定である。

秋学期には学生が一人ずつ研究発表を行った。今年度も美術、密教思想を中心に発表がなされた。四年生は卒業研究のテーマに沿って発表を行ったが、卒論作成の進捗状況の個人差が大きく、それが最終的な卒論の出来につながってしまった。次年度は四年生に関しては発表回数を増やすなどして、自身の進捗状況を把握し質の高い卒論を仕上げるように意識してもらいたい。また二年生、三年生も早めに自分の興味を絞り、効果的なプレゼンテーションができるようゼミでの発表回数、形態等を考えていきたい。また九月八日から十日まで鴨川セミナーハウスにて合宿を行った。次年度は見学会等についても検討したい。

## 沼田一郎

### インド学仏教学演習⑨⑩

①テーマ「インド古代史の基礎知識」

②メンバー 幹事・グステイ・アユ・ケイピ（三年生）、（幹事を除く）四年生七名、三年生四名、二年生一名

### ③活動報告

今年度は R.S.Sharma : *India's Ancient Past*, OUP, 206 を講読した。古代インド社会、文化を概説したものであり、かつ英語

の講読と言うことでこれを選んだのである。途中からは担当者を決めずに、訳させることにした。このほかには研究発表と卒論指導がゼミ活動の柱である。前者については、三年生の段階から卒論を視野に入れた内容を要求するべきであると感じた次第である。後者の卒業論文については、四年生を「卒論指導」として別扱とし、ゼミへの出席を義務づけなかった。できるだけ早い時期にテーマを発見すること、そしてそれについて教員との討論を通して深く掘り下げることを要求した。卒業論文は早くから取り組んだ者とそうでない者との差が出たことは言うまでもない。二部は卒論が選択科目であることから、履修者が激減していることは問題である。

「インド地誌」も昨年度に続いて実施した。これはメンバーが任意に選んだ州、都市等についての情報を最大限収集して報告するというものである。充実した発表が多かったが、ウェブ情報の扱いや発表態度については、よりきめ細かい指導が必要である。

また、後期からはテーマを自由に設定してのディスカッションを取り入れた。ゼミ活動への活発な参加を期待してのことであったが、運営を学生に任せるなどの工夫が必要であるう。

## 伊吹 敦

インド哲学仏教学演習⑩⑫（Ⅱ部）

①テーマ「仏教思想研究」

②メンバー 幹事・木暮祐輔（四年生）、（幹事を除く）四年生二名、三年生五名、二年生一名

③活動報告

前期は凝然の「八宗綱要」を輪読の形で読み進めた。テキストを適当に区切り、担当者を決めて、各自作成したレジュメに基づいて発表をしてもらったが、時間が経つにつれてしつかりとした発表になり、また、自発的な質問が次々出る場合などもあって、取り組む姿勢においては、一部の学生よりもまさっていると感じた。

卒論指導は、授業中に何回か内容を発表してもらい、また、個別にも相談に乗ったが、結果として四年生の卒論提出者がゼロであったことは非常に遺憾である。もともと二部の時間帯に対応できることは限られており、今後、どのように指導したらよいか、その方法を模索する必要がある。

課外活動としては、コンパを行った程度であった。合宿などもできればよかったが、諸般の事情のため果たせなかったのは遺憾である。

平成二十三年度開講科目

- ・ 授業名、サブタイトル、担当者の順に記す。
- ・ 平成二十一年度以降の新カリキュラムと平成二十年度以前の旧カリキュラムの間で、授業の名称に変更があったものについては、新カリキュラムの名称を掲載した。
- ・ 通年科目はA（春学期）・B（秋学期）に分かれるが、担当者が同一であり、かつ、サブタイトルが春秋通じて同一の場合、その区分は省略して記した。
- ・ ただし、半期だけの授業については《春》《秋》と表記した。
- ・ 担当者および《春》《秋》の授業区分に付したカッコ内の数字は、それぞれⅠ部・Ⅱ部の区別を示す。カッコが付されていないものは、Ⅰ部Ⅱ部隔年開講の科目か、Ⅰ部・Ⅱ部の担当者が同一であることを示す。

〈学部〉（五十音順）

- イスラームとは何か《秋》（イスラームのとらえ方） 後藤 明
- インド学仏教学への誘いA（仏教研究入門） 岩井昌悟（Ⅰ）
- インド学仏教学への誘いA（仏教研究入門） 山口しのぶ（Ⅱ）
- インド学仏教学への誘いB（インド学研究入門） 宮本久義
- インド現代思想《春》（インド近・現代の宗教思想家）

宮本久義（Ⅱ）

- インド古典哲学（インド思想史） 宮本久義（Ⅰ）
- インド古典哲学（インド古典哲学概説）《春》 沼田一郎（Ⅱ）
- インド古典哲学（インド古典哲学の諸課題）《秋》 沼田一郎（Ⅱ）
- インド哲学仏教学演習①（インド古代史の基礎知識） 沼田一郎（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習②（インド思想研究） 宮本久義（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習③（中世ヒンドゥー教思想研究） 橋本泰元（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習④（インド大乘仏教の研究） 渡辺章悟（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習⑤（初期仏教研究） 岩井昌悟（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習⑥（凝然『三国仏法伝通縁起』を読む） 伊吹 敦（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習⑧（密教研究およびインド・仏教美術の研究） 山口しのぶ（Ⅰ）
- インド哲学仏教学演習⑨⑪（インド思想研究） 沼田一郎（Ⅱ）
- インド哲学仏教学演習⑩⑫（仏教学分野） 伊吹 敦（Ⅱ）
- インドの芸能《春》（インド芸能の多様性―その中心と周縁） 小西公大（Ⅱ）
- インドの宗教A（ヴェーダの宗教と反ヴェーダ的自由思想） 橋本泰元
- インドの宗教B（反ヴェーダ的自由思想とヒンドゥー教諸思想）



の展開)

橋本泰元

インドの風土と文化《秋》(造形をめぐるインドの歴史と文化)

石川 寛 (I)

インド美術を見る《秋》(ヒンドゥー教美術にあらわれる神々の姿とその意味)

山口しのぶ (I)

インド仏教のあゆみ A (釈尊の覚りとその展開)

岩井昌悟

インド仏教のあゆみ B (大乘仏教とは何か)

岩井昌悟

インド舞踊《秋》(インド舞踊バラタナーティヤムの実技と理論)

久保田幸 (II)

インド文学《春》(文学を通して見るインド文化)

宮本 城 (I)

インド文学《秋》(ヴェンディヤ山脈の頂きからインド文学を見る)

高橋孝信 (II)

キリスト教とは何か《春》(キリスト教はいかに成立したか)

山中利美

華嚴の思想《春》(華嚴経の思想と文化)

金本拓士

現代に生きる仏教《春》(現代の社会問題解決に積極的にかかわる「Engaged Buddhism」について、日本・東南アジア・米

国などの仏教者の事例を学び、現代における自己および仏教

の社会的役割を共に探求する)

現代のインド《秋》(インド近・現代の政治思想家)

戸松義晴

古代インドの社会《春》

宮本久義 (II)

座禅のころ《春》(ころの坐りによって、自己と向き合う)

篠塚純海

サンスクリット文献を読む I (古典サンスクリット入門)

沼田一郎 (I)

サンスクリット文献を読む II (十二支縁起を学ぶ)

計良隆世 (I)

サンスクリット文献を読む (古典サンスクリット初級文法)

渡邊郁子 (II)

社会と宗教 A (近現代の日本社会と宗教)

住家正芳

社会と宗教 B (現代世界と宗教)

住家正芳

写経のころ《春》

張堂興昭

宗教学 II A (アジア宗教の歴史と現状)

山口しのぶ (II)

宗教学 II B (宗教学の諸概念からアジア宗教をとらえる)

山口しのぶ (II)

宗教科教育論《春》(仏教と教育について)

成瀬良徳 (I)

宗教科指導法 I・II (「宗教科」の教育と指導)

成瀬良徳 (I)

宗教間の差異と対話

星川啓慈

宗教とは何か A B 《春》

渡辺浩希

宗教をめぐる諸問題 A B 《春》(仏教の聖者) (オムニパス形式)

渡辺章悟

初期仏教の思想《春》(すべては解脱のために)

岩井昌悟

禅の思想(禅思想の形成と社会との交渉)《春》

伊吹 敦

総合Ⅳ (日本の近代化と東洋大学―井上円了の哲学と実践―)

沼田一郎

卒業論文・製作

渡辺章悟

大乘仏教の思想Ⅰ《春》(空の世界に何があるのか) 渡辺章悟

大乘仏教の思想Ⅱ《秋》(唯識思想論) 橋川智昭

チベット仏教のあゆみ《春》(チベット仏教史における思想と文化) 山口しのぶ

チベット文献を読むA(古典チベット語文法の学習) 山口しのぶ(Ⅰ)

チベット文献を読むB(チベット語仏教経典の翻訳練習) 山口しのぶ(Ⅰ)

中国仏教のあゆみA(初伝期から南北朝まで) 伊吹 敦

中国仏教のあゆみB(隋代から現代まで) 伊吹 敦

哲学概論(知は何を指したのか―西洋哲学と仏教―) 渡邊郁子(Ⅱ)

天台の思想《秋》 林 鳴宇

東南アジア仏教のあゆみ《春》 藪内聡子

東洋思想A(東洋の倫理思想―チベットの倫理思想を中心として―) 島田茂樹(Ⅱ)

東洋思想B(東洋の倫理思想―神秘主義(タントリズム)を中心として―) 島田茂樹(Ⅱ)

日本の思想《秋》(日本文化における「聖なるもの」) 伊東 聡

日本仏教のあゆみA B 竹村牧男(Ⅰ)

日本仏教のあゆみA B(日本仏教思想史) 西村 玲(Ⅱ)

念仏の思想《秋》(念仏の思想の特性を理解する) 本多静芳

パリー文献講読(聖典に直に触れる) 岩井昌悟

ヒンディー文献を読むA(ヒンディー語を学んでインド世界へ) 橋本泰元

ヒンドゥー教とは何か《秋》(ヒンドゥー教の特徴を探る) 橋本泰元

仏教と社会福祉《秋》(仏教の行ってきた社会福祉事業の歴史的展開とその役割について検証し、現代に必要とされる仏教的な社会福祉のあり方を共に提言する) 戸松義晴

仏教の芸能《秋》(仏教伝統歌謡の基本を学び実践してみよう) 橋本泰元

仏教文献を読むA B 橋川智昭(Ⅰ)

仏教文献を読むA《春》(人間の根源は何か?―宗密『原人論』の講読) 佐藤 厚(Ⅱ)

仏教を歩く《春》(仏教を体感しよう) 岩井昌悟

ブッダの思想とその展開A(仏教とは何か) 渡辺章悟

ブッダの思想とその展開B(仏教の思想とその展開) 渡辺章悟

密教の思想《秋》(密教の思想と文化) 金本拓士

ヨーガとアーユルヴェーダ《春》(インドの叡智を探る) 宮本久義

ヨーガのこころ《春》(実践をとおして思想を学ぶ) 番場裕之

〈大学院〉

博士前期課程

インド哲学研究Ⅰ

デレアヌＢ・フローリン

インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ

橋本泰元

インド哲学研究Ⅲ

永ノ尾信悟

サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ

宮本久義

初期仏教研究Ⅰ

下田正弘

初期仏教研究Ⅱ

松村淳子

大乘仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ

渡辺章悟

大乘仏教研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ

山口しのぶ

日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ

竹村牧男

日本仏教研究Ⅱ

大久保良俊

博士後期課程

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ

宮本久義

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ

橋本泰元

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ

渡辺章悟

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ

山口しのぶ

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ

竹村牧男

平成二十三年度卒業論文

〈I部〉

松藤 文子 チベット仏教における神通力を持った人物の研究―

パドマサンバヴァとミラレバ―

近藤佐由里 ムガル細密画と浮世絵の比較

萩原 菜摘 チベット密教のヴァジュラヴァイラヴァについて

湯徳 聖 かつてのヨーロッパ人が描いたインドと、怪物学に与えた影響

森田 直道 インドオフシヨア開発について

古川 優 良寛の詩から見られる思想

富田 弘輔 立川武蔵著 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps

Shodaka-upacāra pūjā, II, main worship の翻訳

小林 大昂 初期仏教における餓鬼の研究―天宮餓鬼から捉える

五道輪廻と六道輪廻の差異―

吉岡 美希 ヨーガの起源と日本への伝播

大川 詩織 神劇ラーム・リーラーにおける「苦からの解放」―

ラームナガルの事例を中心に―

萩原久美子 インドの女性の社会進出を阻む差別と慣習

関 武志 ガネーシャ神の信仰属性について―多様な属性を持つ神―

福島 匠 五火二道説から見る死の思想―輪廻と解脱の道―

小原 慧子 インドにおける人と動物の研究―人と動物の良好な

関係について考える―

堀之内彩乃 現代人にヨーガを活かす―心からの幸せを―

生の円環―苦の克服へのアプローチ―

駒井 実穂 リンガ崇拜について

堀口顕太郎 インドとギリシャにおける有の哲学

伊藤 恵太 ラビンドラナート・タゴールと日本の関係

生嶋 光 善性房鸞英の研究―親鸞を支えた名僧―

板敷 真純 古代インドから伝わるヨーガ(考察)―賢者たちから受け継がれる知識―

山田 和輝

藤井 明 虚空蔵菩薩信仰の展開―*śaḥsraḥ pa nam mkha'i snying po zhes bya theg pa chen po'i mdo* 翻訳を通して―

堤 博枝 Alice Boner によるヒンドゥー教美術の法則について

近・現代のゾロアスター教―パールシーの宗教改革―

高橋 周平 不空羅索観音の図像的特徴とその成立について―図

像と經典郡を中心に―

宮崎 梓 アーユルヴェーダの哲学と理論

宮城 寛太 *ṛāṇā* ラーヤン作『ジャッジ』の和訳と解説

小澤なつみ 道元の清規について―『永平清規』と古規復古運動

石山 匠 を中心に―

橋本 順正 沙弥教信の研究―非僧非俗への道―

- 有賀 優太 装飾からみるインド  
 高橋 誠 インド憲法の研究  
 大滝 康平 アッサム紅茶の研究  
 市川 航也 宗教教材としての黙想―宗教知の利用問題点―  
 前澤 統子 アーユルヴェーダと現代医学の融合  
 清水 浩祐 現代タイ王国においてタンマガイ寺がもたらした  
 もの  
 吉内 美保 法然の念仏における三心の意義  
 渡部 安衣 日本に住むインド人IT技術者からみる日本の課題  
 帯田 啓祐 源信の思想―二十五三昧会の活動を通しての研究―  
 山本 彩香 過去から現代の自分へいきるアーユルヴェーダ  
 尾上 海 ジャワーハルラール・ネルーの思想  
 田村 純一 日本における巡礼と観音霊場―秩父三十四所観音霊  
 場を中心に―  
 戸高 由貴 インドIT産業の光と影  
 森川 望 チベット問題の研究―中国支配の実態―  
 鎌田 研 インド死生観研究―タゴール詩集『ギーターインジャ  
 リ』に見る神の希求―  
 加藤 貴行 宗教共存について―宗教多元主義からみた日蓮  
 足賀 司朗 日蓮の報恩観  
 高橋 宏規 大乘における三昧思想について―『首楞嚴三昧経』  
 における「空」思想の研究―  
 矢野 聖実 クリシユナ信仰におけるバクティ思想

遠藤 耕治 『ヴァイシェーシカ・スートラ』をめぐる諸問題

〈Ⅱ部〉

林 明音 寺院装飾の時代における変遷と宗派による相違―旧  
 本郷区の木鼻からみる―

諸田江実里 アーユルヴェーダの効果について

櫻井 美佳 ネパールのネワール族における社会と文化

大学院修士論文

津田 昌良 『教行信証』の往還二種回向についての考察―還相  
 回向を中心として―

天野まゆこ 凝然『華嚴法界義鏡』における十重唯識についての  
 考察

島崎 慶子 ヴィシヌ神の創造神話成立過程の考察―プラーナ  
 聖典を中心として―

中村 玲太 初期真宗教学の弥陀仏土論―親鸞から存覚への受容  
 と変容―

今村 秀明 如法の追求―叡尊・西大寺教団の初期の成長過程―

東洋学論叢 第37号

(東洋大学文学部紀要 インド哲学科篇 第65集)

平成二十四年三月三十日 印刷

平成二十四年三月三十日 発行 [非売品]

発行所 東洋大学文学部

東京都文京区白山五―二八―二〇

電話 インド哲学科〇三三九四七五七

印刷音羽印刷株式会社

東京都新宿区山吹町十五番地

電話 〇三三三二六八一―四四〇

# BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters

Toyo University

NO. 65

March, 2012

Series of

INDIAN PHILOSOPHY

XXXVII

---

## CONTENTS

---

- IBUKI, Atsushi : The Compilation of the Treatise  
on the Five Upāya of the Mahāyāna and It's Transformation ..... (1)
- IWAI, Shogo : Is This World with or without Buddha Now? :  
Relics of the Buddha and the Living Buddha ..... (118)
- NUMATA, Ichiro :  
Situating the Prāyaścitta Section in Dharmasūtras ..... (128)
- HASHIMOTO, Taigen : A Study of the Gorakhnāth's *Bānī* :  
Text, Japanese Translation and Notes of *rāga-rāmagrī* 11-32 ..... (154)
- MIYAMOTO, Hisayoshi :  
Rules of Pilgrimage described in *Tristhalīsetu* ..... (168)
- 



Published by  
**TOYO UNIVERSITY**

Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo